

【短報】埼玉県および群馬県からのベニヨツボシテントウダマシの採集記録

ベニヨツボシテントウダマシ *Ancylopus phungi* Pic, 1926 はトンキン（ベトナム北部）産をもとに記載されたテントウダマシ科の甲虫である。Stroecker(1972) はアジアとヨーロッパ地域の *Ancylopus* 属をまとめた際に、本種の分布域に中国、チベットのほか日本を含め、具体的な産地として富士国立公園の河口湖を示した。

本種はその後永らく日本からは未発見だったが、先ごろ Sogoh & Yoshitomi (2017) によって 45 年ぶりに再発見されるとともに韓国からも記録された。日本での既知産地は北海道、青森県、福島県、長野県、山梨県で、近似種ヨツボシテントウダマシ *Ancylopus pictus asiaticus* Stroecker, 1972 が平野部

を中心に低標高地で確認されているのに対し、本種は東日本のやや山地寄りで確認されている。

筆者は、これまで採集例がなかった関東地方の平野部に位置する埼玉県川越市および群馬県高崎市において、本種を確認しているため報告する。

1♀, 埼玉県川越市小ヶ谷（入間川河川敷, 標高 20m）, 2. I. 2012；130♂♂111♀♀, 埼玉県川越市池辺（入間川河川敷, 標高 22 m）, 11. XI. 2017；10♂♂6♀♀, 同地, 2. XII. 2017；2♀♀, 群馬県高崎市新町（烏川河川敷, 標高 57 m）, 28. XII. 2017, いずれも筆者採集, 保管。

埼玉県ならびに群馬県初記録。増水後に流れ着いた漂着ゴミ（ヨシ枯れの堆積, 流木, 板きれ, 発泡スチロールなど）の裏面や内部から採集された。近縁のヨツボシテントウダマシと同所的に得

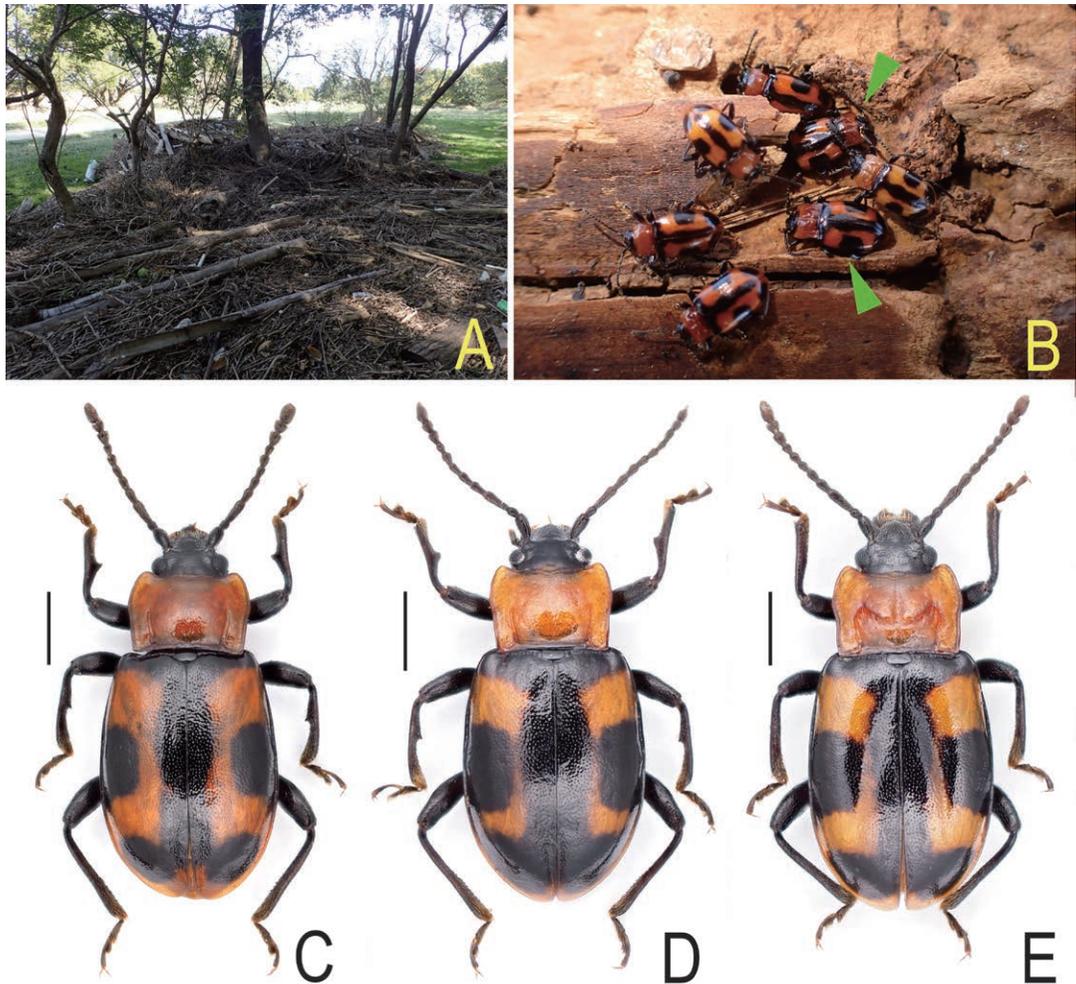


図1. ベニヨツボシテントウダマシ（川越市産）とその生息環境。A, 確認環境（入間川河川敷内。増水時に漂着したゴミが堆積している様子）；B, 板切れの裏面に集合していた2種（中央の矢印で示した2個体がベニヨツボシテントウダマシの♀で、周囲のほかの個体はヨツボシテントウダマシ）；C, ♂；D, 黒化傾向の強い♂；E, ♀（スケールはいずれも1 mm）。

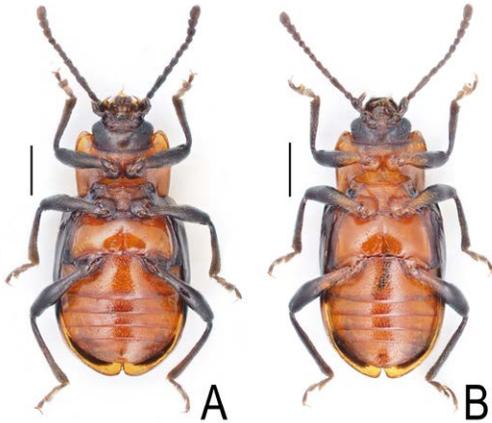


図2. ベニヨツボシテントウダマシとヨツボシテントウダマシの区別点。A, ベニヨツボシテントウダマシ♀; B, ヨツボシテントウダマシ♀ (A, Bとも川越市産。スケールはいずれも1mm)。

られただけでなく、生態写真に示したように、両者が同じ集団内に混在していることも少なくなかった(図1B)。ただし、ヨシの枯れ茎内に2~5個体の小集団が形成されている状態では、多くの場合、集団はどちらかの種だけで構成されていた。

増水後の採集のため、本来はマイクロな生息環境が異なるものが一時的に同所で見つかった可能性はあるが、埼玉県川越市では近接した下流部で2012年にも採集されていることから、両者が混生することは珍しくない可能性もある。参考までに、上記ベニヨツボシテントウダマシが確認された地域で採集したヨツボシテントウダマシのデータもここに留めておく。

111♂93♀♀, 埼玉県川越市池辺(入間川河川敷, 標高22m), 11. XI. 2017; 8♂4♀♀, 同地, 2. XII. 2017; 22♂27♀♀, 群馬県高崎市新町(烏川河川敷, 標高57m), 28. XII. 2017, いずれも筆者採集, 保管。

なお, Sogoh & Yoshitomi (2017) は両者の区別点として斑紋パターン, 雄の中脛節の突起の位置, 雄の後脛節の形状, 雄交尾器の形態を図および検索表の中で示したが, 再記載中に記述した脚の色の差異に関しては検索表に含めなかった。しかしながら, 混在する両者を野外で見分ける際にも脚の色は有効な区別点と思われたので, 以下に腹面からみた両者の違いについて詳述してみたい(以下, ベニヨツボシテントウダマシをベニ, ヨツボシテントウダマシをヨツボシと省略)。

ヨツボシの腿節基部および転節, 基節は橙色を呈するのに対し, ベニでは腿節基部は黒~黒褐色で, 転節, 基節も黒褐色であり, 野外で生体を見ても, 斑紋パターンと合わせて識別が可能であっ

た。また採集した個体を実顕微鏡下で観察すると, Sogoh & Yoshitomi (2017) の指摘どおり, 中胸腹板突起の幅がベニのほうがやや広い傾向にある。これらの特徴は雌雄ともに共通するので, 交尾器も含めて性徴によってたやすく同定できる雄個体に比べ, 特徴に乏しい雌個体の同定の一助になると思われる。

特に腿節基部の色は, 油が出るなどした古い標本でなければ比較的わかりやすい特徴と思われ, 台紙全面に貼り付けられた標本でも少し標本を傾ければ, 背面側からでも確認することができる。ただし, 他地域から得られた個体は少数のヨツボシを検しただけなので, 真に同定に使える形質であるか断定はできないため, ほかの形質も合わせて同定したほうがよいことは言うまでもない。脚の色に関しては, 各地の両種を精査する必要があり, 同好諸賢にも両種の識別に有効な形質か確認をお願いしたい。また, Sogoh & Yoshitomi (2017) が日本から初めて記録したニセヨツボシテントウダマシ *Ancylopus borealior* Strohecker, 1972 の脚の色に関しては, 基節, 転節, 腿節の1/2が明るい褐色とのことである。

末筆ながら, 種々ご教示を下さった吉富博之博士(愛媛大学ミュージアム)に深謝する。

引用文献

- Pic, M. 1926. Nouveautés diverses. Mélanges Exotico-Entomologiques, 45: 1-32.
 Sogoh, K. & H. Yoshitomi, 2017. A revision of genus *Ancylopus* (Coleoptera, Endomychidae) of Japan. Elytra, New Series, 7(2): 421-438.
 Strohecker, H. F. 1972. The genus *Ancylopus* in Asia and Europe. Pacific insects, 14(4): 703-708.

(亀澤 洋 350-0825 川越市月吉町 32-17)

◇学会の発行物・バックナンバーの販売委託先◇

昆虫文献 六本脚

〒102-0075 東京都千代田区三番町 24-3

三番町 MY ビル 3 階

TEL: 03-6825-1164

FAX: 03-5213-1600

E-mail: roppon-ashi@kawamo.co.jp

URL: <http://kawamo.co.jp/roppon-ashi/>